妖精の落し物

ラキスタリ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて、非常に広大で神秘に包まれた世界『カルデア』多くの種族、多くの国々が存在した。国々は、たがいに争いを始めた。　しかし、その戦乱の最中、妖精族、龍人族、魚人族、蟲人族、古人族のそれぞれを統べる王達が手を組み『５華族連盟』を結成。戦乱を収め平和へと世界を導いた。　その戦乱から３００年後、古人族…今の人族の国『エルフェン』の地方街にて性別を偽り家族と暮らす少女が居た。　彼女とその家族が、５つの国と世界の命運を左右する運命に巻き込まれる。

批評お待ちしています。

目次

1―1　妖精の朝　1
1―2　妖精の怒り　15

1―1　妖精の朝

朝、太陽の光が家の窓から差し込み、夢の世界に居る俺に目覚めの時間だと教えてくれる。
「う、う～」
一応、目覚めた俺ではあるが、まだ眠い。
「そういや、今日、早出だったな」
本日の用事を思い出し、眠り足りない自分の体に、ムチを打って藁の香りがするベッドから起き上がる。ベッドと言っても藁に白いシーツをかけた簡易寝所だ。時々、チクチクと藁が刺さって寝にくい思いもする。けれども寒くなって来た夜を過ごすには、必需品だ。
「いつまでもボーとしてないで準備しなきゃなんねぇな」
ノソノソと寝起きでダルイ身体を動かし、古びた木製の扉を開ける。ボロボロで金具が何度も外れてしまい悩みの種の扉だが、我が屋で一番初めに迎え入れてくれ風や雨を家に入れないでくれる存在。
「う～寒み～」

扉を開け、出迎えてくれるのは、冬に入りかけの冷たい風。
毛布に包まりながら外に出る。安物の靴で庭に生え切った草を踏みしめる。そのまま、庭から少し離れた井戸まで歩く。
「うひゃ～本気で寒い…、早いとこ家入ろ」
井戸のそこに桶を落し、カラカラと滑車の帯を引き、水をくみ上げる。
それを備え付けたあった容器に移し替える。だが、寒空の中、水場での作業は、正直堪える。
物凄く冷たくて手の感覚が無くなりそうになりながらも、容器をもって何とか家に入る。
「さむさむさむ～」
俺は、とにかく寒さを紛らわせるために暖炉に薪をくべ、掌を向けて暖を取る。
しばらくして温まった俺は、ポットに先ほど汲んでおいた水を入れ、暖炉の上に置く。
「えーと、これとこれと…、あれ？ターバン何処にやったっけ？」
ポットのお湯が沸くまでに着替えを済まそう、そう決めた。
俺は、急いで我が屋に一つだけあるチェストから、藍色のシャツと灰色のズボンを引っ張りだす。それを着るが中々大きめの服のため、ダボダボになりつつも着替えを終える。

しかし、いつも頭に巻いているターバンだけがどうしても見つからない。
ゴソゴソとチェストの中を捜索するが手がかり一つ見つけられない。
「これだけ探して無いとなると…。アイツだな～」
顎に手を当てて、思案していたら。
ポットが沸騰して独特のピューという音が聞こえた。
「やば！ポットが噴く！」
俺が大急ぎで、台所に駆けつけた頃。
台所には、俺よりも背がかなり低め、金髪の髪にコバルトブルーの瞳、なにより特徴的なのは，先のとがった長い耳の男の子がいた。男でありながら非常に中性的で整った顔立ちをしている。
身内の贔屓目を引いたとしても端正な顔立ちで、後6年も経てば女達は放っておかない美青年になること間違いなしだと思う。
「おはよう、お湯噴いてたから火を消しておいたよ」
「お、おう、サンキュー。相変わらず気の利いた弟で俺は助かるよ」
そう、おわかりだと思うが、この少年は、俺の弟である。
名前は、リック。今年で10歳になる少年だ。
見た目だけだと何処かの貴族風に上品な雰囲気のある奴だけど、性格は、結構腹黒く

家長で年長者の俺ですら服従させられるほどの何かをもっているガキだ。
「あ、お茶」
俺が台所についた時、弟によって火は消されており、よく見るとご丁寧にポットのお湯でお茶まで用意されていたのには、驚いた。
なんというか、手際が良すぎる気がする。
「紅茶淹れておいた、後少し蒸してから飲むと美味しいと思うよ。後、これ」
「あ、ターバン！」
「ミーニャが昨日、玩具にしてたみたいだね。」
リックから手渡されたターバンを受け取る。やはり、ミーニャが持って行っていたかと安心する。
席に座れば？とリックに言われたので俺は、木製の少しギシギシが限界まで来ている椅子に座る。
そして、リックがカップに紅茶を注いでくれたので香りを楽しみつつ、カップに口を当てて、飲む。
うま！
口の中に広がった紅茶の甘味や苦みが、絶妙なバランスで俺の寝起きの脳や身体を活性化させる。

おもわず幸せ気分で表情が崩れた。今、鏡を見ればさぞかし間抜けな顔をしているだろう。だが、それほどまでに美味しかった。リックの将来は、喫茶店のマスターでもいい気がしてきたよ。

これ、美味い紅茶なら金を払ってでも飲んでいたい。

弟の淹れてくれた紅茶を満喫し、仕事までの時間をポケーと過ごしていると。

「マ～～ニャ～～」

何やら二階の階段から、可愛らしい声が聞こえ、椅子を後ろに傾けて階段を覗く。

するとズルズルと毛布で全身をくるんだ毛玉にチョコンと小さい脚が生えた塊が、毛布の先を引き摺りながら降りてきた。

「ミーニャ、そのまんま降りてきたら階段落ちちゃうよ?」

「マ～～ニャ～…ニュア!?」

言った傍から、小さな足が毛布をふんずけてしまい、ポーンと階段から床に強制ダイブ。

だから言わんこっちゃない！俺はすぐに、階段の下にスライディングで駆けつける。

木の床で若干ケツがアチチな事になっているのもお構いなし、優先すべきは一つ。

「おっ…いて～」

「にゅあ…ごはん～」

タイミング良く俺の胸に飛び込んできた毛布の塊、俺は何とかキャッチしてみたんだけど、軽いとは言え一人の子供。ドンと鈍い音が部屋中に響く。
階段の中段からのダイブを受け止めるのは、骨は折れてないけど骨が折れる。
背中と胸の痛みに苦笑しつつ、毛布をめくっておちょこちょいな『愛娘』の顔を確認する。
「おいおい、階段から落ちたと思ったらいきなりご飯要求かよ」
「みゃ、耳くすぐったい」
毛布をめくると小さな、『おてて』という言葉がぴったりな手で、目をごしごしと擦っている娘。
色白で少しつり目だけど、瞳は寝起きのためか潤んでいるも綺麗に澄んでいる。八重歯が目立つ可愛らしい女の子が俺の目の前で欠伸をしていた。
俺は、思わず抱きしめながら何より目立つ赤い色の髪を撫でながら、通常の耳の位置とは大きく違った位置にある獣耳を撫でる。
すると娘は、くすぐったかった為、身を捩って俺の腕から抜けだす。
「ふっ、おはようミーニャ」
「ふぁ～～、おはよーう」
未だに目を擦りながらではあるがキチンと挨拶を返したので俺は、頭を撫でながら片

手で抱き上げ、椅子に座り膝の上に座らせる。
座らせた瞬間、パンツからはみ出ている赤毛の尻尾が大きく揺れる。
俺の膝の上に座り、リックが皿載せたパンをもって来たのでそれをモシャモシャと紅葉のような小さな手でつかんで食べていた。
この子の名は、ミーニャ。3歳3カ月の女の子で俺の一人娘である。
本当に可愛らしく、嫁にだけは、絶対に出したくないと思うほど俺は愛している。
なのに、子供の可愛らしさに小動物的な可愛らしさが合わさって俺は、ついつい猫可愛がりしてしまい「しつこい」と怒られた時は心の中で泣いた過去を持つ。
親の愛は、子供に伝わり難いのだと勉強になった。
リックとミーニャ、この二人が俺の家族であり、かけがえの無いほど大切な宝だ。
ミーニャを抱っこしたまま、ボーと頭を撫でて時間を過ごしている時。
「ねぇ、ゆっくりしてるところ悪いんだけど、仕事行かなくて良いの？」
机の向かい側で同じく朝食を食べていたリックが、紅茶の入ったカップを飲み終え机に置いた瞬間に言われた一言で現実に引き戻された。
「いけね！早く言えよ！」
「いや、なんか幸せそうにしてたからさ」
「そこまで気を利かせないでいい！」

我が屋に昔からある大きな時計の針が、出社時間ギリギリを示していた。
リックの野郎絶対ワザとだ。
大慌ててミーニャを膝から降ろし、椅子にかけてあったターバンを手にとる。
そのまま、走って家を出ようとすると、リックが後ろから「忘れ物」と言って弁当を投げてきたため、慌ててキャッチ。
弁当まで拵えてくれていたとは…、我が弟は大変出来た弟であるな。
「行ってきます！後、晩飯も帰りに買って来るから」
俺がドアを開け、手を振りながらそう言うとリックが手を振り返し、ミーニャが「お魚がいい～」とリクエストしてきた。
行ってらっしゃいって言ってほしいぞコンチクショウめ。
「魚は一週間ずっとだろ？偶には、別の物も食べなきゃだめだぞ。じゃリック、ミーニャ頼んだ」
俺は、そう言い残して荷物の入った袋を肩にかけ、家を出る。
時間がギリギリのため、結構ガチで走る。
一家の大黒柱である俺の稼ぎが無くては、娘や弟が飢え死しんでしう、だから仕事は比較的、真面目。
遅刻は、少し多いものの家庭状況から工場長にも何度かお情けで見逃して貰ってい

る。

ただ、今日だけは遅刻したくないのだ。先輩の仕事を代わりに引き受けてまで遅刻したくない。

その想いから全力疾走していた。

家から大分離れると地面が、補正されたレンガの道になり早朝だが人の数も多くなってきた。

「それでね」

「そういえば二番街に新しいお店が出来たの知ってるかしら?」

などと早くから井戸端会議に華を咲かせているご婦人方や仕事に出かける旦那を見送る奥さんなど色々な人々がそれぞれの生活を始める。何故か俺が横を通り過ぎると、男女年寄り子供とわずに俺の方を見て固まっていたのか気になるが、今はそれどころではない。

街の中を駆け抜けていると俺の雇って貰っている職場が目に入り、ペースを少し落として深呼吸する。

息切れしたままで、工場に入ったら「また遅刻ギリギリで走ったな」と同僚に笑われてしまう。

もう今週だけで、3回目なのだ…絶対笑われる。

だが、本日は非常に呼吸が楽で息切れもほとんどしないで走れた。
早起きのおかげだろうか？
「さて、行くか」
「あら、リゼットちゃん今日は早く仕事にいけそうね」
深呼吸を終え、一歩踏みすと同時に、俺の右側。
香ばしく食欲を刺激する香りを漂わせる焼きたてのパンがズラーと並ぶ、この街で一番人気のあるパン屋『妖精のパン屋』の奥さんが俺に声をかけてきた。
昔からこの店でパンを買うため顔見知りではある。この奥さんは、この人族の国『エルフェン』では非常に珍しい妖精族の女性だ。
腰より長く鮮やかな金髪、優しげな瞳、そして妖艶な唇。出る所が出ている妙齢の美女。
名は、エリーゼさん３５歳。このパン屋で未だに看板娘？をして客を引き入れている通称『パン屋の美人妻』として有名な人だ。
旦那さんは、いたって普通のパン職人で、真面目に働く顔に一目惚れしてエリーゼさんが猛アタックの末に結ばれたらしい。
近所の男性からは、よく【くたばれパン屋】と言われている。
「何、人の顔見てるの？」

「うーん、なんでも無いですよ。まぁ今日は余裕で行けそうです」
俺が笑いながらそう言うとエリーゼさんは、俺の顔を指さして呟いた。
俺が首をかしげながら待機していた時に発せられた言葉。
「今日は、男装しないでいいの？」
「え」
俺は、自分の手が震え出すのを感じ、同時に頬の筋肉が引き攣っていく感覚を覚えた。
震える手を見ると、しっかりとターバンが握られていた。
いつも頭に巻いているターバンが俺の手にあると言うことわだ、つまり髪の毛が隠せておらず。
深くターバンを被ることで隠していた顔も表に出ており…素顔が丸見えだと言うこと。
ふと、パン屋のガラスに写った自分を見た。
「あ」
自分の姿を見て、言葉が漏れた。
ガラスに写っていたのは…。
薄い桃色の髪。長く煌めく細い髪は、俺の腰よりしたまで延びており風に揺られることで、日の光を受けさらに輝いていた。

睫毛は長く、鋭く切れ長の真紅の瞳、その下にある泣き黒子。紅を塗らずとも赤く形のいい唇。鏡には、ハッキリと『女』の顔がそこにあった。

自分の顔ながら…、この顔は自分に合っていないと自覚せざるを得ないほど綺麗な顔をしていると思う。

ナルシストになるつもりは、ない。ただ、なんと言うか本当に俺の性格にミスマッチ感が凄いのだ。

（さ、最悪だ…、早起きの代償がこんなところで…）

今は、驚きからか戸惑いの表情で、口を少し開いている。

よくみると顔だけでなく胸を隠すのも忘れていた。

普段は、サラシで潰してある胸も今回は、大きめの胸が上着を中から押し上げその存在を主張していた。

息がいつもより楽なのは、これが原因だったのだ。

胸の形がしっかりと強調されており、襟元からは、くっきりとした胸の谷間が覗け、とてもじゃないが男には見えない姿だった。

そういえば、説明を一切していないが、先程から話しているのは、俺、リゼット・リート。

普段から男装で職場でも男として働き、話し方から何まで男の俺だが。

実際は、１５歳、彼氏いない歴＝年齢の弟と娘と暮らしている子持ちの『女』である。
「やっちまった～～～」
俺が大きな声で叫ぶとエリーゼさんが少し驚き、周りの目線が一気にこちらに注がれる。
余計に目立つ事になり、下手をすると職場の仲間に見られる。
「その格好じゃ、工場行けないでしょ?家で身だしなみ整えなさいな」
「ありがとー」
俺が性別を偽っていることを知ってか、店の奥に入れてくれた妖精様。
全力で感謝しつつ、大慌てで妖精様のご厚意に甘え、部屋で鏡と布を借り、すぐさま胸に巻いていた下着布をはずしサラシとして借りた布で胸を潰す。
頭にもターバンを上手に巻き、女性特有の長い髪を隠す。これがいつものスタンスである。
「お、おせわになりました」
「本当におっちょこちょいね～リゼットちゃんは」
エリーゼさんの前に出たときは、もう羞恥で顔が真っ赤だった。
エリーゼさんは、終始ニコニコ笑顔で見送ってくれた…恥ずかしい。
キチンと礼をいい、人が少なくなったタイミングで工場に向かった。

だが、しかし。
ただでさえ遅刻寸前だった状況で、無駄なタイムロスを犯してしまったのだ。
その結果は言わずもがな。
「また遅刻かリゼット!!お前は、今日はとことん、こき使ってやるから覚悟しろ馬鹿者!」
「ごめーんなさーい!」
うえ～～～ん、また遅刻しちまったよ～～。

1―2　妖精の怒り

太陽が傾き、地平線に沈んでいくソレは、仕事終りを表す。
工場の中は、蒸気機器を扱っているため、比較的に蒸し暑い。
「工場長、今日はもう終わりですよね？」
「だな。日もだいぶ傾いてきたし、今日はこれまでだな」
かなり大きめのレンチを握りしめ、蒸気機関の組み立てをしていた俺。
蒸し暑い中、汗を大量に流しながら作業に没頭していた折。
日が大きく傾いているのが目に入り、となりで見張っている工場長に声をかける。工場長は、４０歳くらいのふくよかな体形のオジサンだ。人柄は良い方で、仕事もできる（だから仕事には厳しい）。
俺を雇ってくれたのも、この人だ。これまでにもいくつもの恩を感じている。
「作業しゅうーりょーう」
工場長が俺の話を聞いた後すぐに、ベルを鳴らす。
ベルの音が工場中に響き渡ると、多くの同僚が作業を切り上げ、それぞれ仲間と更衣室に向かった。

俺は、必然的に最後の誰も居なくなった更衣室でしか着替えが出来ないので、先に着替えを得た先輩と他愛の無い会話を楽しむ。
「今日は、一段と絞られてたなお前」
「そうなんすよ、おかげでもうヘトヘトですよ。これから晩飯買って、家事もしなきゃいけないのに」
「まだ、働き足りなかったかリゼット・リート?」
「げっ、工場長…ぬわぁああ」
「あらら～」
先輩相手に、ブーブーと工場長の仕打ちを愚痴っていると真後ろから、頭を鷲掴みにされる。
振り向くと愚痴の対象が笑顔で俺の頭にアイアンクロー。
ギリギリと軋む頭、悲鳴を上げる俺、やれやれ顔で去っていく先輩。
「ギブです!ギブギブギブア――プ」
故意のアイアンクローは、キツかった。
★☆★☆★
それから時間が過ぎ、現在夕飯の買い物中。
「いって～まだ痛む。頭の形変わったんじゃないかなコレ?」

「リゼット君は、口が軽そうだからね」
「まさか、後ろにいるとは、思わねーよ。後、ジャガイモ３つね」
八百屋のおっちゃんと会話しながら商品を次から次に選び籠に入れて貰う。
「そう言えば、リゼット君知ってるかい？」
「ん？なにを？」
野菜の鮮度を見極めていると、おっちゃんが話題を振ってきた。
なんだろう？と品物を選ぶのを中断する。
「最近ね、リゼット君の家周りの民家が地上げに合ってるって話だよ」
「地上げって本当に？」
「そう、まだリゼット君のとこは被害ないみたいだね。なんかお貴族様が街のチンピラを雇って積極的にやってるなんて話も耳にするよ。かなり強引な手を使うそうだ」
「お貴族様が、庶民の民家を力づくでね…、おっかない話だな」
「全くだね、しかもお貴族様が筆頭だってんで、役人さんも動こうとしない。この前なんて家が燃やされかけたらしい」
おっちゃんの話で、最後の話だけは心当たりがあった。うちから少し離れて何件目かの婆さんの家が燃えたと聞いた。
あの火事って地上げが原因だったのかよ。

「まぁ、最近物騒だから気をつけな」
「そうするかね、噂が噂である事を祈ってるよ。おっちゃん全部でいくら？」
「銅貨１０枚だね、ついでにリンゴ三個つけてあげよう」
「サンキュー」
籠がいっぱいになった所で、今日の給料の中から、銅貨１０枚を渡す。
お金を受け取るとおっちゃんは、籠の中に林檎を入れてくれた。
今日は、リンゴのタルトでも食後に出してやるかな。ミーニャとリックの奴、喜ぶかな。
「はい、確かに。また来ておくれよ、サービスするからね」
「あいよ～」
おっちゃんから、買物籠を受け取り、帰り道を真っすぐに歩く。
もう日が沈み、同じく仕事を終えた方々が帰路に就いて、温かい家庭に帰っていく。
寒い中、必死に働き、家に帰るとあたたかい家族が向かてくれる。…世のお父さん方は、そういうのを明日の労働気力にしていくんだろう。
そんな家庭を貴族はめちゃくちゃにしようとしてるってわけか。
「これだから、貴族って奴はよ」
本気で物騒な世の中になってきたよ。もし、うちに地上げがきたらどうしようかな…

荷物まとめて逃げる？何処にだよ。
俺達家族に行くところなんて無い。
「ん？すげー人だかりだ」
帰り道をポツポツ歩いていると、ご近所さんの家の前に人が集まっているのが目に入る。
俺は、何があったのか気になって駆け寄ってみると、家の壁や玄関がボロボロに壊され、奥さんが泣き崩れていた。
「ねえどったの？」
「さっき、スミスさんの家にへんな連中が家を出て行けって脅して、家を壊したらしいんだよ」
まさか、こんな近くまで地上げに来てるなんて。
（噂が噂でなく、真実だったのかよ）
言い表せない不安が俺を襲う、それに追い打ちをかけるように近所のおじさんが俺に言った。
「リゼット君、あいつら、君の家の方向に向かったみたいなんだ」
「本当かよ、くそ！」
「役人には、頼れないから自警団が来るのを待っ!?リゼット君！」

うちに向かったと聞いた時、顔が青ざめていくのを感じ、買物かごをその場に放置したまま、走る。

オジサンが何か話していたが俺は、うちに置いてきた娘と弟の安否が心配でそれどころじゃない。

（お願いだ。間に合え、先生の二の舞はもう沢山なんだよ！）

無我夢中で俺は、走った。街から少し離れた森に入り、さらに真っすぐにうちに向かって走る。

息が苦しく、脇腹も痛むけど、足だけは止めたくない。

他の事は何一つ、考えずに走り続けた。するとようやく我が家の目に入った。

（やっぱりいる！）

家の玄関の前で、１０人ほどのゴツイ男達がハンマーなどを持って集まっていた。

玄関の扉は開いており、リックが表に出ていた。

★☆★☆

「何だこのガキは」

「おい坊主、母ちゃんか父ちゃんいねぇかな？ちょっと俺ら話があるんだけどよ」

全く持って鬱陶しい。

僕は、義姉さんが出かけた後、ミーニャの世話をしながら本を読んでいた。
お昼を食べ、ミーニャが近所の猫友達と遊びに行ったので洗濯や掃除を済ませ、帰って来るまで読書に没頭しようと持っていた矢先。
だらしなく出た腹部、気品の感じられない二重顎の顔、そのくせ着ている服は上等の物。
手にはジャラジャラと、宝石の類をブクブクと太った指に嵌めたお貴族様がゴツイ身体とバカっぽい面の男達を連れて訪れた。
「親はいませんよ。上の兄弟は働きに行ってるんでまた今度にしてください。それじゃ」
僕は、読書タイムを邪魔された機嫌の悪さを隠すことなく、不敬な態度のまま、扉を閉めようとした。
だが、貴族風の男の傍らにいたごつい図体の男の手が、扉を掴む。
そして、ドアを閉じようとする僕の邪魔をする。
「あの、離して貰えませんか？」
「ふん、ガキしかいねぇなら都合いいぜ、やっちまっていいんでしょ旦那？」
「そうだな、二度も足を運ぶのは面倒だやってしまえ」
ガタイ良いの一番の大男が貴族風の男に尋ね、貴族風の男が答える。

男が答えると、後ろで松明やハンマーを持った男達がジリジリと迫って来る。
（なにか面倒な事に巻き込まれた気がする）
ガバッと前に出た男に胸倉を掴まれ、持ち上げられる。
息苦しくもあるが、何より腹立しい。
試しに僕を掴む手を振りほどこうとするが、体力の無い僕では無理のようだ。
「悪いな坊主、お前の家はブッ壊させてもらうぜ」
「うわぁ、本気でめんどくさいな」
「生意気なガキだな」
おっと、どうやら心の声が口に出ていたらしい。
僕の態度が気に入らないのか、男の顔に青筋が立った。
すると、僕と掴んでいる逆の手で拳を作り振り上げる。
「やめねぇか!!」
「なんだ？」
「痛った」
男が僕を殴ろうとした時、横から聞き覚えのある怒鳴り声が聞こえた。
その声の大きい事、鼓膜によく響き、脳を揺さぶる。
不意に驚いた男は、僕を地面に落した。

お尻から地面に着地したため、結構痛い。
「おやおや、このガキの兄が帰って来てしまったようだな」
「お前ら、他人の家の前で何やってやがる!」
貴族風の男がめんどくさそうな表情で大声の主を見る。
大声の主は、言わずもがな僕の義姉様。走って帰って来たのだろう、顔は真っ赤で息切れが激しく、肩が上下していた。
「お前がこのボロ屋の主か、なるほどボロ屋にピッタリの服装だな。実は、この地域一帯に鉄道という乗り物が走ることが決まってね、我が領地にいる諸君らに立ち退きを指示していたんだ」
「立ち退きの指示? いくらあんたが領主だろうが、土地の権利は所有者のものじゃないのか?」
「ふん、庶民が偉そうに。男爵であるこの私が、土地を寄こせと言っているんだ。むしろ、自ら差し出すのが当然であろう? それをあろうことか拒むなど、領民にあるまじき行いだ」
「ふざけんじゃない! この腐れ貴族! 家や土地は、絶対にわたさねぇ」
貴族男の周りにいた男達が義姉さんを囲み。貴族男が義姉さんに話かける。
すごく勝手な言い分に義姉さんが噛みつく。

気持ちは痛いほど理解できる、けどこの人数を相手にするのは賢くない。
「生意気な！」
「あうっ」
「あっ！」
義姉さんの言葉に、怒りを覚えたのか義姉さんの頬をぶった。
さすがの僕もこれには驚きと怒りを覚えた。頬を拳で殴られた義姉。
僕よりは大きいとはいえ、小柄でしかも女性である義姉の体。
貴族男の不意打ちで大きくよろけ、玄関の壁に頭をぶつけ倒れる。
「庶民の分際で…。おや？こいつもしや女か？」
「へへへ、どうやらそうみたいですね。しかも上物ぽいです」
「どれどれ」
壁に頭をぶつけた瞬間、義姉のターバンが外れ長い髪が露わになる。
そのせいで義姉さんが女だとバレた。非常に不味いことこの上ない。
頭を強打したせいで意識が朦朧としている様子の義姉、義姉の顔に手を伸ばし貴族風の男が厭らしい目でジロジロと眺める。
「ほう、この田舎くさい街に住んでる割には、上々だな。おいこの女を連れていく。私の邸まで運べ」

「了解しました大将、飽きたらワシらに卸してくださいよ。こいつなら娼館に高値で売れますよ」

「っ…はな…せ」

男2人に腕を掴まれ、上体を起こされた義姉。

意識が少し覚醒したのか、振りほどこうと足掻く、しかし大の男2人の腕力に勝てるはずがない。

そのまま、連れ去られそうになっている。咄嗟に手を伸ばすが、後ろから男に襟を掴まれ届かない。

それにしたって人身売買や誘拐、完全な犯罪行為を堂々と行うなんて…この国が少しずつ壊れ始めている気がする。

(どうする?ここで僕が力を使ったら、師匠との約束を破る事になる。だが、使わなければ気に入っていたこの家庭という環境が壊される)

僕は、悩んだ。師匠との約束か、家族として僕を迎えてくれる義姉を取るか…。

師匠の定めた掟を破ると言う事は、師匠に対す侮辱。

しかし、義姉を見捨てると言う事は、人にあるまじき行いだ。

(迷うまでもなかったな)

僕は、目を閉じ心を穏やかにし深層心理奥深くの扉を開ける。

「何してるんだこのガキ?」
「捨て置け、どうせ子供だ。何もできやせん」
「大将がそう言うんなら…いいですけど」
　男が僕を掴む手を話すタイミングを狙って必殺をお見舞いしようと思った矢先。
「マニャ?おかえり…?」
　最悪のタイミングすぎる。突如、ミーニャが屋根から下りてきた驚きのせいで、深層心理の扉が閉じてしまった。ミーニャの登場に、男達も驚いていた。
　しかし、ミーニャに注目を集まるのは、なお悪い。
「何かと驚いたが…、このボロ屋には金の元が多いらしいな。このエルフェンでエルフはおろか、獣人までもいるとはな」
「しかも獣人の雌ですぜ、こりゃそのお譲ちゃんより高値で売れますぜ。大将、この獣人俺たちにくだせぇよ」
「かまわん好きにしろ」
　ミーニャは、この人間の国で大変珍しい獣人という獣の特徴を持った種族の娘。
　僕じゃ、どれくらいかわからないけど、奴隷商などで愛玩用として高値で売買がされてるって聞いた…。
　一人の男がミーニャを捕まえようと手を伸ばす。

咄嗟に体が動いた。考えないで体が動くなんて、僕にしては珍しい。
そして、愚かだなっと飛び出してからしみじみ思う。
「やめろ！」
「邪魔するな」
「あがっ…ゲホッゲホッ」
ミーニャに触れようとした手を、ミーニャの前に出て振り払ったものの、後に大人の拳を腹にもらう。
骨が折れたんじゃないかというほど激痛に前のめりに倒れてしまい、胃の中のもの全てを吐きだしそうになる。
運動系は、やっぱり苦手だね。呼吸が出来なくて目の前が真っ暗になりそうだ。
「リックに～！みゃ？いや～」
「ミーニャ…ミーニャを離せ！」
「おっと、お前も暴れるな。両方とも縄で縛っとけ」
巨体の男にミーニャが抱え込まれる。
義姉さんがその様子を見て大暴れするが直ぐに男達に黙らされる。
僕が無視されている間に再び深層心理億の扉を開けたいが…痛みで無心になれない。
腕力じゃ絶対にこいつらに勝てるわけがない。後少し時間があれば…、そう思わずに

はいられない。
「はなして～」
「痛って～、このガキ噛みつきやがった！」
ミーニャが男の腕の中で大暴れし、男の腕にかじりつく。
人間と違い、犬歯が発達し、顎も常人より強い獣人に齧り付かれた男の腕からは血が噴き出す。
痛みに顔を歪めた男、隣にいた男がミーニャを引き離し口を布ふさぐ。
「くそ、血が止らねぇ…」
「おい、そんな子供に手間取ってないでこの家を燃やしてしまえ」
「うぁあああ～ん」
「うちの娘を離せ！ミーニャ！」
状況が今一理解できていなさそうだけど、恐怖からかミーニャが大きな声をあげて泣く。
まだ、3歳だ。これだけ大人数に囲まれ誰も護ってくれないとなれば泣きたくもなる。
義姉さんも地面に押し付けられ身動きが取れてない。取れていないが必死にミーニャに手を伸ばす。

「この女、そのチビが現れてから急に五月蠅くなったな」
「う〜う〜」
「このガキ、いい加減に大人しくしやがれ!!」
「やめて〜!」
常人より腕力脚力が強いミーニャに悪戦苦闘するチンピラ達。
さっき噛みつかれた男が腕に布を巻いてミーニャの前に近寄り、手を大きく振り上げる。
義姉さんの悲鳴じみた声が響く中、無情にも手は振り下ろされた。
「ミ: ャ」
乾いた音と苦しむような声が僕や男達、そして義姉の耳に聞こえた。
★☆★☆★
俺の目の前でミーニャがぶたれた。
ぶたれたミーニャは、地面に落ちてフルフルと震え泣き声を止めた。
家族を守りたいがために、走ってきたのに何にも出来なくて、弟や娘が暴力にさらされても庇ってもやれない。
ミーニャがぶたれた時、俺を押さえていた男達の拘束が緩み俺は、大急ぎで抜け出しミーニャに駆け寄る。男達も小さな子供を本気でブツとは思って無かったのだろう呆

けていた。
「ミーニャミーニャ！……え」
　地面に落され震えていた娘の元まで駆け寄った時、ミーニャの頬は腫れあがっていて口からは、血が流れていた。きゅっと閉じられた目からは涙があふれ出しており…恐怖と痛みにおびえる娘の姿がそこにある。だが、顔色がドンドンと悪くなっていき、どう見ても普通じゃない。
「おいこのチビ…なんか様子が変じゃないか？」
「俺はそこまで強く殴って無いぞ？」
「死んだなら放っておけ、貴様らに金を払っているのは私だ。家と一緒に燃やしてしまえばよかろう」
「し、しかし大将、殺しまでやるなんてワシら聞いてないですよ」
　人の娘を殴っておいて…責任逃れや止めを刺せなど、男達が言い合いを始める。
「ミーニャ…」
　我が娘を抱きしめ、頬を撫でるが顔色が良くなる訳でも震えが収まるわけでもない。
　自分の無力さ、甲斐性の無さに涙が出てくる。
「くそくそくそ！」
　あいつらが…、娘を傷つけた。娘を苦しめた。俺の子供を殺そうとした。

『殺セ、殺セ、己ガ子ヲ傷ツケル存在ヲ、決シテ許スナ』

何かの声が、頭と心臓の両方から聞こえた気がした。

声が聞こえてから、俺の頭の中は黒一色に染まっていくのが判る。俺は、殺さなきゃならない。

種族の繁栄を脅かす存在を生かしておける筈がない。

これは、種の掟。己が生み育てし子孫の命が脅かされる事があってはいけない…例えどんな事があろうとも。

無意識に頭に流れてくる言葉、その言葉の全てが俺の胸に深く残る。どこか懐かしくとても大切な教えな気がした。

「そうじゃ『妾』は、娘を傷つけた者を殺さなければならん。妾の招集に答えよ英雄共！」

血が沸騰したんじゃないか？と錯覚するほど熱くなり、その熱が体中をめぐり目の前が真っ赤に染まる。口が勝手に開き、俺とは思えない口調で何かを言った瞬間、俺の意識は飛んだ。

「なんだ、この女急に目つきが変わりやがったぞ」

「とりあえず、気絶させて連れて行こうぜ」

「顔は傷つけるな？初めに私が味見をするのだからな」

妾が起き上ったとたん、男どもの意識は妾に注がれる。

皆が皆、心の内をあらわしたような下衆い顔をしておるわ、これから見難い顔をさらし、死んでいく者達にはお似合いかもしれぬがな。

「妾を本気で怒らせ、妾に流れる血を刺激した事を後悔しながら…死ね」

血の祝祭は、始まりを迎える。